

アルザス史 12 最終回 現在のアルザス

志村 良知

私はアルザスの日系企業で7年間働いた。今の私の人生の約10パーセントに相当するが、それ以上の経験をし、考え、学び、思い出のある7年間であった。この『アルザス史』を書いてみようと思ったのは、そうした時間を与えてくれたアルザスへのお礼のつもりである。

アルザスに会社を設立したのは、アルザス州の外国企業誘致政策に乗ったのと、日本人とのビジネス共通語として英語が使えるからである。

アルザスの大学卒業者は、普通にフランス語、ドイツ語、英語をビジネスで使えるレベルで操る。私が所属した営業とロジスティックスの50人あまりの部門にはアルザス人、フランス本土人に加えて、イタリア人、アイルランド人、英国人、ベルギー人、オランダ人と、アルザスに根付いたドイツ、フランス、スイス、イタリア、スペインからの移民の子孫がいた。

言葉ではそれが標準の英・仏・独のほか、フラマン語、オランダ語、スペイン語、イタリア語、日本留学歴のある日本語の話者がいた。アルザス人はよそ者に寛容・融和的で、排除したり差別したりしないというのはかなりのレベルで本当である。1998年のサッカーのワールドカップ・フランスの時は、それぞれが縁深い国を覇権したが、フランスへの応援は共通であった。トーナメントに入ると同じサイドの強敵イタリアの関係者はかなり「苛められた」。有難いことに我ら日本人も初出場を果たしたチームの応援で輪の中に入れて貰えた。

一国一言語主義のフランスであるから、教育はもちろん、日常生活で使われるのは出版物も看板もテレビもフランス語のみで、駐在員も奥さんも子供も町や小学校ではフランス語が必須だった。私の赴任時にはその制度は無かったが、まもなく、新たな居住登録外国人は駐在員とその妻も含めて商工会議所でのフランス語会話講習受講が必須になった。

初等教育へのアルザス語の導入も行われているが、アルザス語は山一つ谷一つでの違いが大き過ぎて『標準アルザス語』というものが確立していないことが教育の障害になっているという。学校では単独で教えるだけでなく、ドイツ語とトリリンガル、あるいは英語を含めてのマルチリンガル教育として教えるということもあるようである。

いずれにせよ、現在でも親から口伝のアルザス語が話せる人は多い。もちろんそういう人は必ずフランス語とのバイリンガルである。私の同僚のアルザス人も大部分そうだったし、家庭では家族とフランス語ではなく、アルザス語で話しているという者も珍しくなかった。

赴任直後、日本人駐在員に「町にはドイツ語で話している人たちが結構いるね」と言うと「それがアルザス語ですよ」と言われた。異邦人の耳にはドイツ語に聞こえる言葉である。

逆に子供にはアルザス語を話させないという親もいた。フランス語が訛るようになるというのがその理由で、事実私の耳でも「この人のフランス語は訛っているな」というアルザス人は多かった。工場長はシュバイツァー博士と同じカイザースベルク出身で、相当訛っていた。ということはシュバイツァー博士のフランス語も訛っていたであろう。

フォーサイスの小説『ジャッカルの日』の主人公ジャッカルがフランス傷痍軍人に化けたとき、英国人であるジャッカルのフランス語の不自然さをカバーするため、偽身分証明書の出身地をコルマールにしていた。アルザス出身なら訛っていて上等なのである。

アルザス人同僚は普段の会話の中でボージュ山脈の向こうを「フランス」と呼んでいた。英国人が海峡を隔てた大陸国を「ヨーロッパ」と呼ぶのに似ている。日本では「アルザス・ロレーヌ」と一緒にされるが、現代のアルザス人にとってロレーヌは「フランス」であって、特段の連帯感はない。もっとも現在ボージュ山脈を挟んでアルザスと接しているロレーヌの南部、ムルト県、ヴォー県は、歴史に出てくる「エルザス・ロートリンゲン」のロートリンゲンではないからで、北部のドイツ国境の元ロートリンゲンのモーゼル県となら連帯しているかもしれない。私の二人目の秘書さんはモーゼル県のメッス近くの出身で、アルザス語は話せなかったもののドイツっぽい響きのファミリー・ネームでドイツ語は堪能だった。

コルマールのお祭りで、EU旗、アルザス州旗、コルマール市旗の繰り返しの旗を掲げているのを見たことがある。故意なのか何なのかフランス国旗＝トリコロールが欠けていた。『最後の授業』のアベル先生の習字のお手本「フランス アルザス フランス アルザス」の繰り返しとは正反対の光景だった。しかしながら、ドイツへのシンパシーは全く持っていない。ドイツ人も我が同胞と信じこむくらいドイツ語を自在に操り、ドイツ的な名前の村に住み、ドイツ語で意味がとれるファミリー・ネームを持ちながら、ドイツは好きではないらしいのである。それでいてボージュの向こうのフランス本土のことは「フランスでは」と外国であるかのような言い方、扱いをする。

かといって「アルザス共和国」は、よそ者の私が酒の席で、アルザス独立戦争には義勇兵の救急車運転手で参加するから呼んでくれ、ボージュ山中の道路には詳しいから、と手を挙げればその場では受ける、という程度の冗談でしかなかった。